

# 老人と犬

黒川文





# 目次

1. 追跡	
1. 追跡 . . . . .	3
2. 邂逅	
2. 邂逅 . . . . .	11
3. 回収	
3. 回収 . . . . .	19



## 1. 追跡



## 1. 追跡

老人は山道の手前で四輪駆動車を停めた。

往年の名車、ランドクルーザー七〇だ。オプションでバンパーに電動ウインチまで搭載している。実際に活用していて傷だらけでさびも浮いている。

ドアを開けて車から降り立つと、後部ハッチを開け鍵の付いた箱から長年使い込んだライフルを取り出した。ライフルを肩に担ぐと後部座席を開けて、愛犬のジョンを外に出した、雑種だが賢い相棒だった。真っ黒で形はシェパードに似ているが少し小さかった。普段はお愛想をするだけで、今も車の周りを走り回り時折、老人の足にすり寄りしっぽを振った。べちべちと当たるしっぽの感覚で老人は、ジョンを孫を見るような目で見た。愛玩犬なのだが、ライフルを持つときは猟犬なのだ。

老人は山を見上げた、天気を気にしていたのと、奴、と老人が呼んでいる長年のライバルと言うべき獲物がいるのだ。

老人はランクル後部に積んだトランクボックスを開けて、防水性のジャンパーを取り出した。そしてリュックを取り出し中身を確認した。今日明日分の食料と、携帯食料のクラッカーとチョコレート、ミネラルウォーターと肝心の銃弾である。少し大きめの三〇口径ライフル弾であった。箱の中に百発入っている。老人は五発だけ取り出し、ライフルの弾倉に四発装弾し一発は銃に込めた。日本ではライフルについては五発以上の装弾能力は認められていない。

銃はつるつるに磨きが掛かった木製ストックが使い込まれた年月を語っている。だが、黒光りのする銃身は油で磨かれ、整備の良さを、また物語っていた。それを老人は肩に掛け、ジョンの首輪にはリードを掛けた。

「行くぞ、ジョン」

くーん、とジョンは鼻を鳴らして返事をした。老人は山道を登りだした。

いつも登る山道だ、老人は健脚ぶりを見せながら登っていった。まだ九月上旬なので雑草が生い茂り行く手を阻む。ジョンだけは喜々として草むらに入っていった。

ジョンがクヌギの木の下を掘り出した。老人は、面倒そうにリードを引っ張った。

「おい、行くぞ」

がうー、とジョンが唸った。面倒な奴だ、とばかりに老人は更にリードを引っ張った。ジョンは獲物を探し当てたらしく前足で地面をほじっている。最後に何やら口にくわえてもぐもぐして飲み込んだ。

「あ、こ、こら」

老人は、ジョンの頭をリードの端で叩いた。くーん、と甘えた声でごまかす。木の下には虫の幼虫、芋虫がいる。それを探しておやつにしているのだ。長いドライブでお腹が空いていたのかも知れない。だが、野生の犬は元々一日一食だ、愛玩犬になってしまうと最初は一日一食でしつけても段々と人間のペースでものを食べるようになる。しまいにはおやつの時間までせがむようになるのだ。

仕方がないな、と言う顔をして老人は更に、先に登っていった。この十数年、何回も上った路だった。

あれは十年前のことだった、季節もほぼ同じだった。老人は散弾銃の狩猟免許を取り立ての初心者を引き率して山に登ったのだ。あのときは他の会員の連れた猟犬がいた。引率のベテランが互いに無線連絡を取りながら、イノシシやシカなどの獲物を追っていった。最後は猟犬が風下から周り込んで獲物を追い詰める。初心者はただ、照準を定めて散弾銃の引き金を引くだけだった。確かに仕留めた、その感触はベテランの老人にもわかった。

だが猟犬が探しに行っても、そこには獲物を引きずった後があるだけで、釣りで言えば坊主という惨憺たる状況だった。日本では銃弾も安くない。それで必要な最低限の口径の銃弾を買うのだが、獲物によっては大口径の銃弾が必要だ。イノシシにはそれ相応の……散弾銃なら十番ゲージか十二番ゲージ……銃弾が必要だった。

老人は皆には言わなかったが、熊の足跡を見つけた。この山の主かも知れない大きさの熊だった。それが、猟犬に見付からないように風下から近づき、射撃できない高所に獲物を移動したのだ。それがこの事件のからくりだった。

他の人は文句を言いながら帰って行ったが、老人はこの熊を仕留める気でいた。

家では銃を分解して、部品を清浄油で洗浄し、部品に摩耗がないか確かめ、当たりが悪ければヤスリで直した。老人の使っているレミントンM七〇〇は軍用狙撃銃から転用された銃でボルトアクションと言うタイプだ。一発撃つごとに銃底のレバーを手のひらで握って後ろに引き、排莢し、前にレバーを戻すときに次弾を給弾するのだ。機構が単純な銃で故障が少なく精度が高いのが特徴である。ただ、排莢するときには右手を持ち替える必要があるので、山の中で使うには不向きで、最近では持ち替えの必要のないポンプアクション方式やオートマチック方式を使う人が多い。だが、仕留めるときは一発だけでいいので、老人は、そんなに銃弾をまき散らす人を軽蔑していた。だから、この四十年も前に発売された、ボルトアクションライフルを愛用しているのだ。精度でこれにかなう機種は出ていない。

個人的に何度かこの山の、例の熊を仕留めようと、試みる度に結果は裏切られた。奴はいつも、老人の風下に位置し、猟犬に察知されることを嫌い、正体を見せなかった。そのうち老人も付近の地形を調べ、奴に逃げられないようにすればいいと確信した。将棋や囲碁と同じ要領であった。

それで今回も、愛犬ジョンと一緒に山に入ったのだ。ほとんど意地と意地のぶつかり合いであった。もっとも奴にとっては生活のかかったことであった。

ジョンが木の向こう側に向かって吠えだした。老人はその吠え方でジョンが遊んでいる、とそう感じた。老人はジョンのリードをはずした。ジョンが勢いよく木の向こう側に飛び込むと細長い生き物が飛び出して逃げていった。

「イタチか」

老人はつぶやいた。ネズミか何かをくわえていた様だったが、今回はイタチには用はなかった。

「おい、ジョン」

老人が呼ぶと、ジョンは「おじいさん、やったでしょう」と言わんばかりに、誇らしげに、クンと鳴いて戻ってきた。老人は、ジョンのいた跡を確認すると、熊の糞と足跡、それもかなり大きなものを発見した。場所柄、ツキノワグマだと思うのだが、正体はまだ不明である。

木の実を食べに来たのか、他の獲物を食べた後、用を済ませてここを立ち去ったに違いないと老人は思った。棒で糞を分解すると、温かくはなかったが、柔らかく今日の午前中くらいと推定された。木の実を食している様だった。

「ここから山に帰ったようだな」

老人はつぶやいた、足跡はこの辺をうろうろして方角を偽装してはいるが、いつも山に帰るときに、この行動を見せている、老人の記憶ではこのまま獣道をたどっていけば会える、そう確信した。ジョンの首輪にもう一度リードをつけ獣道を進み出した。ジョンは「心得ました」と言わんばかりに、奴の足跡の臭いを追跡し始めた。

老人はもう、この山の周辺は獣道から、水の通り道まで細かく記憶している、足跡で偽装しても、近くの木に身体を擦りつけて臭いをつけたりしていればその毛の種類で、獲物の種類が判別できた。今回は確実に奴だ、と確信した。

ただ、一度も奴を見たことがない。それだけが不安要素だった。おそらくツキノワグマの年季の入った大物、と予測しているのだが、今まで見たツキノワグマより明らかに少し大きかった。

ジョンはどんどん草をかき分け、進んでいく、愛玩犬のくせにまるで野生に帰ったかのような敏捷さを見せた。だが、調子に乗りすぎた。獣道からわずかにずれて進んでいた。臭いを追っていたはずが、途中で途切れて道も崖に行き当たってしまった。

「ジョン、臭いを追っていたんじゃないのか」

ジョンはすまなそうな顔をした。単に全力疾走がしたかっただけのようだった。老人は諦め、近くの岩に座り、リュックからミネラルウォーターを出して飲んだ。それから丁度昼になったので、あんぱんを一つ取り出し、二つに割った。中のあんこが美味しそうだ。

それを見たジョンは勘違いしたのか、自分のしっぽを噛んでくるくると回り出した。

「おじいさん、僕はうれしくてたまりません。パンを半分も呉れるなんて」

老人はわざとジョンの前であんぱんをほおぼって見せた。ジョンはお座りをして待っている。

「ジョン、お前なんか半分もやるものか。それにさっき何か食べていただろう」

老人がそう語りかけると、ジョンは言葉がわからない振りをして目を輝かせ、しっぽを振った。老人はしょうがないなと言う顔で、あんぱんの一切れを手でジョンに与えた。決して食べ物を地面に投げることはしなかった。ジョンはうれしそうにそれをくわえると、草むらにととととと走り去り隠れて食べていた。頭を隠してもしっぽは見えている、老人はそれを見て苦笑した。

「頭隠して尻隠さずとはこのことだな」

ジョンが食べ終わるのを待って、老人はリードを引っ張り、元の獣道に戻った。鋭い目で木の幹に付いた奴の体毛や、足跡を探した。だが、さっきの痕跡を最後に奴の気配は消えていた。

「参ったな」

と、つぶやいた。ジョンが不思議そうに見上げている、「おじいさん、次へ進みましょう、早く早く」と目でせかしている。老人はうるさそうに目をそらした。こうなったら、一旦後戻りして手掛かりを探さなければならない、面倒だが、闇雲に山に入るのは危険なのだ。ぼちぼちとさっき上ってきた山道を下った。ジョンは「もう帰るのですか」と言う目で楽しそうな足取りだった。

やがてさっきジョンが暴走を始めたところに来た。老人は、かがみ込んで奴の足跡を探し始めた。ジョンも同じように辺りを探しているが、奴を探していないことは明らかである。

老人の鋭い目が老眼鏡越しに、雑草についた一本の剛毛を探し当てた。

「おい、ジョンこっちのルートだ！」

ジョンはきょとんとしている。老人はリードを引っ張った、ジョンは仕方なさそうについて来た。今度は間違いないとばかりに、獣道を走った。ジョンは一応臭いを把握している様な素振りを見せていたが、老人も今回は信用しなかった。

やがて、獣道が二股に別れている箇所差し掛かった、老人は、手掛かりを探したが、それらしき形跡はなかった。風は山頂方向から吹いてきている、風上にいないのはジョンの反応から確かだった、ならば、風下方向にいると考えるしかない。

老人が考え込むと、突然、ジョンは山の下側斜面の草むらに向かって激しく吠えだし

た。老人はまさかと思いつつもライフルを銃口を下に向けて構えた。戦場なら草むら越しに銃撃を加える様な場面だが、日本では未確認のまま、しかも水平撃ちなど出来ない。だが、草むらの向こうに何かいるのは確かだった。老人も気配を感じた。

ガサササーと草ズリの音がし、茶色い物体が一瞬見えた。老人は間に合わないと判断しライフルを腰にためたまま発砲した。ドーンと言う銃声と共に、発射した銃弾は奴の肩口をかすったが、直撃はしなかった。だが、奴の登場を見越して用意した三〇口径フルパワーライフル弾だ、かすただけでも肩の骨を砕いたらしく。うおおおおと言う鳴き声を残し再び草むらに消えていった。

老人はライフルのレバーを引き、銃弾を再装填すると共に、ジョンの首輪からリードを外した。ジョンは「おじいさん、任せてください」と言わんばかりの勢いで奴の後を追っていった。老人は一抹の不安を抱きながらもジョンの野性本能を信じた。

馬鹿な犬でなければ、絶えず風下に回り込みながら後を追うはずだ。老人も、気合いを入れ、ライフルを担ぎなおした。全力で走ったところで熊や犬の速度には追いつかないことくらい分かっていた。

草むらを突っ切って山を下りるわけには行かないので、老人は別の獣道を探し、同じ方角を進んだ。時々、木々の合間を縫って、ジョンの鳴き声が聞こえる。老人は更に歩く速度を速めた、途中岩場があり老人は気をつけながら下りていった。暫くすると平坦な部分があり老人はそこを進んだ。

ジョンの鳴き声が出た。その方向を見ながらライフルを両手で持ち、歩みを進めると、突然足下が崩れるような感触を覚え姿勢を崩した。老人はライフルを守るようにそれを抱いて倒れ、なおかつ頭部を守るべく肘をついた。

ぐきつと言う感触で、思いつき肘を岩場にぶつけた。

「あいたたた……」

腰も打っていた。半身起き上がって、自分の足下を見ると動物の糞だった。

「くそっ」

と、老人は洒落の様な台詞を吐いた。臭いからジョンのものと分かった。こんなところで用を足したと言うことは、奴の追跡は真面目にやっていないと言うことだ。老人は起き上がりリュックからスコップと古新聞、ポリ袋を出しジョンの糞の後始末をした。どんなときでもルールを守る、それが年寄りの年寄りたる所以なのだと言わんばかりに、嫌みを込めて丁寧に掃除をした。嫌みの相手はジョンである。

掃除が終わると、老人は肝心のライフルの点検をした。こちらは異常がなかったが、老人は肘を痛めレバーが引けなくなってしまった。ライフルを一旦持ち替えないと、連射が出来ない、これは、一発でしとめないでさっきみたいなスカ弾を撃つと、こちらの致命傷になることを意味した。

「今日は帰ろうかな」

と、弱気になった老人の心も解さず、ジョンが嬉しそうに戻ってきた。くるくるまわってリードをつけろと言っている。

「おじいさん、きれいな場所を見つけましたよ。さあ行きましょう」

そんな目つきで老人を見た。老人は嫌みったくジョンの言うことなんてわからない、と言う態度を取った。ジョンはお座りをして、きゅーん、と猫なで声を出し、しっぽを振った。老人はしょうがないと言わんばかりに起き上がり、ジョンにリードを付けた。その瞬間ジョンは必死の勢いで、リードを引っ張った。老人は腰が痛いのに、ひいひい言いながらジョンの後について行った。

老人はジョンを連れてきたことを後悔しつつあった。普段の仲間同士で行くとき、猟犬の中に入ったジョンは仲間の猟犬を見習って同じ様に行動していた。それで老人は雑種で十分という判断をしたのだ。但し、犬は社会性のある動物だから、まともな猟犬がリーダーになったらそれに従うのは当然なのだ。それを失念していた。一匹だけだと、わがまま放題の気まぐれ犬になってしまうことを今の今まで知らなかった。

ジョンが老人を連れてきたのは、きれいな小さな沢だった。老人が手をつけると水は冷たく、飲めそうなくらい澄んでいた。現にジョンはのどが渴いたと言わんばかりにぺちゃぺちゃと音を立てておいしそうに水を飲んでいて、それがつられて一緒に生水を飲むほど軽率な老人ではなかった。いくらきれいな清流でも寄生虫などがいるものだ。犬は身体の中にバクテリアを飼っているらしく、滅多に腹下しすることはないが、人間がアニサキスにやられたら高熱を発して、運が悪ければあの世行きだ。

老人はさっき汚れた靴だけ洗って、ジョンが満足するのを待った。

「おじいさん、こんな場所知らなかったでしょう？」

ジョンが自慢げに老人を見た。

その瞬間、老人はしまったと思った。こんな沢など今まで見たことがない、つまり、勝手知ったるエリアから、奴の縄張りに誘い込まれたことを意味した。完敗だと老人は悟った。奴が意図的に老人をここに誘い込んだのか、ジョンが偶然迷い込んだだけなのか、それは分からない。だが、前者だとしたら致命的だった。

## 2. 邂逅



## 2. 邂逅

老人は浅い沢を、登山靴のまま渡り反対岸の軟らかい土の上に立った。ジョンが不思議そうな顔で見ている。老人はジョンを放っておいて、土の上の足跡を探した。ジョンの位置を中心に百メートルの範囲で探したが、足跡や木の幹にすりつけた毛の跡は見付からなかった。

「すると、奴はこの沢を登っていったのか……」

老人の予想では、奴はこの沢に伝って山の上を目指していた。足跡と臭いを消すために、わざと水の中を進んだのだ、そう推理した。

少し大きな岩の上に立ち、見上げるとかすかに動くモノが見えた。ジョンは気付いていない。

砂地に降り立つと、老人は、ライフルにスコープを取り付けた。ネジを半分締めて銃眼をのぞき、スコープのドットと銃眼との誤差を修正しネジを最後まで締めた。もう一度、スコープをのぞくと、沢を登った当たりに立っている松の木によじ登る熊がいた。

——奴かな？

しかしその熊は、好敵手の割に動きが間抜けに見えた。老人はそのままライフルの安全装置を解除した。

その瞬間、またジョンが吠えだした。老人も近くに大型動物の気配がし振り向いて探した。老人が銃を向けると草ずりの音だけ残して消えていった。さっきの松の木の熊は毛が黒くツキノワグマと思えた。奴とは大きさが違っていた。

いよいよ、日が傾いてきた。腕時計を見ると五時過ぎだ。老人は野営のため沢の岩場の上に倒木の細い物を集めて火を付けた。夜間、暖を取るためと野生動物が近づかないようにするためだ。

老人がごほごほと、肺活量の衰えた息で火をおこし、ようやくたき火らしくなると、時折、バチンとはぜる木の音でジョンはどこかに隠れてしまった。結構野性の血が残っているらしく火を怖がるようだった。老人としては、連れてきた意味が半減してしまう。だが、怖がるのをすぐには訓練は出来ない。今日二回目の食事で菓子パンを半分に割り、ジョンのところに持って行ってやった。

火は一晩中、パチパチと音を立てて燃えていた。大抵の野生動物は近寄ってこないと思っていた。

老人が眠りかけたとき、沢の向こう岸に気配を感じた。ずっと老人を監視しているかのような目つきを感じた。老人が目をしょぼしょぼさせながら目をこらすと、たき火の明かりで二つの目玉が光を反射していた。夜行性動物の目だった。細い立木の向こう側からこちらを覗いていた。

——体長二メートルはあるかな。

老人は目の位置からそう判断した。もはやツキノワグマではない、そんなに大きなモノがいるわけがなかった。老人はゆっくりとライフルをたぐり寄せ、弾倉の中身を確かめ四発入っていることを見てそれを元に戻し、こちらを監視している奴に銃口を向けた。奴は動じなかった。

立木の向こうに隠れた、しかも、大きな身体を残したままである。

——このまま撃っても肩か脚しか狙えない。俺の肘が痛んでいるのを計算に入れているのか？

老人にとっては新たな脅威だった。仮にこの位置から奴の肩を撃っても、即座にライフルのレバーは引けない。持ち替えている間に、奴の爪の餌食になるだろう。だからと言って立木を貫通して奴の心臓を直撃することは、一種の掛けだった。三〇口径フルパワーライフル弾だから十分可能な射撃だと思ったが、奴の胸の筋肉や骨格の頑丈さを考えると——それすら未知数だったが——十分な貫通力を得られない可能性がある。その場合、瀕死の重傷を負った奴が老人に最後の一撃を加えるだろう。奴もあの世行きだが老人もここが終焉の地になる。ハンターとしては不名誉な死に方だった。

しばらく、老人は奴と対峙していたが、いつまでも射撃姿勢を取ってられるほど体力はない。老人は狙いを定めて、立木の根元を狙って引き金を引いた。

ドーン、と銃声が響き、立木の根元を大きく穴を開け貫通した。

老人は、急いで股の間にライフルを挟み、左手でレバーを引いた。排莖されたカートリッジが煙を噴きながら横に飛んでいった。

次弾を装填し、もう一度ライフルを構えたとき、既に奴は立木の向こうから姿を消していた。老人は沢を越えて、草むらの向こうの立木の箇所を調べた。奴の体毛らしき赤い毛が着いていて、地面には血痕が残っていた。やはり、それなりのダメージを追ったようだった。

「奴の正体はヒグマかも知れない。だが、本州にあんなモノいるのか？」

誰か分からないが、老人は文句を言いたかった。今まで数々のハンター達の上前をはね、巧妙に人間に戦いを挑み、常に勝利してきたのだ。ツキノワグマと思っていたが、今日見たあの大きさから、体長二メートルのヒグマと分かった。

老人の勘では、奴はこのまま巣に戻り、傷を癒して態勢を立て直し、反撃に出ると確信していた。やられっぱなしで、はあそうですかと、それですむジョンの様な性格ではない。

老人はたき火を消し、水を掛け、燃えかすを土に埋めると、菓子パンの残りでジョンを呼んだ。

クーン。

「おじいさん、怖かったです」

そう言いながら茂みの中から出て来た。たき火が消えると月明かりしか見えない。暗い中での移動は危険だとは承知の上で老人は移動の準備を始めていた。弾倉にさっき撃った一発分を足して、五連発できるようにし、ジョンにリードを付け、奴の血の跡を追跡し始めた。

なにぶん夜間の行軍で、しかも知っている獣道もないエリアでもある。老人もその不利を十分悟っていた。

ジョンは、臭いを嗅ぎながら、奴の跡を追跡している。クンクン、ときどき飽きてきたのか、草むらで用を足したりしている。

老人に取り、不本意なのはこちらの山にはあまり知識がないことだ。

老人は一度追跡をあきらめ、高台に上がるルートを取った。暗い中を月明かりで八〇〇メートルも進んだ。獣道なのであちこちに折れた枝が当たり、ジャケットが少しすり切れた。高台の上の岩に上がると、遠くに、川が流れているのが月明かりを反射してきらりと光るのが見えた。手前は真っ暗だが、老人の記憶が確かならば、田んぼだと思った。この季節なら稲刈りの前か後かどちらかと言うところだろう。いずれにしても水を張っている季節ではない。

——ここは、隣の村外れの山の上だ。

ようやく老人は自分の位置が分かった。老人が山に入った箇所から山の尾根伝いに、隣の村外れに入っていたのだ。田んぼの向こう側には川があり、普段は山から風が吹き降りているが、明け方一瞬だけ、海から上がってきた風が川から山に吹き上がる。

老人はそれを利用して一気に熊の風下、しかも、高所に位置する案を考えたが、一点だけ考慮すべき点があった。あまり奴を追い詰めて、村の方向に逃げ込めばライフルは使えなくなる。それこそ、警察を呼んで大捕物になるだろう。そんなことになったら、ベテランハンターの称号を返上しなければならぬどころか、迷惑じじいのレッテルを貼られてしまう。プライドの高い老人に取りそれだけは許せない。だが、裏を返せば奴はそこまで老人の心理を読んで行動していることになる。それもまた、老人のプライドが許さなかった。

老人は一計を案じ、荷物をまとめてライフルを担ぎ、ジョンのリードを引っ張り高台

を降りた。そしてまた獣道を進んでいった。暗くて前はほとんど見えない。ジョンに道案内をさせれば良かったのだが、こいつは老人が通れるかどうか何て気にせずにとんどん好きなペースで前進するから始末が悪い。

ジョンのリードが木の枝に絡まり、途中でペースを乱される。

——連れてこなければ良かった。

とさえ、思った。

そして脚をくじきながらも、田んぼの見えるであろう草原に出た。奴があつた田んぼへの視界を遮っているやぶの向こうに潜んでいるとするなら、こちらは現在風上だ。老人は奴が必ずあのやぶへ現れると確信していた。それに、反転して村落に逃げ込むにはその崖をひとつ飛びである。人間なら大怪我だろうが、熊なら怪我一つせずに落ち込むことが出来るだろう。

老人はそこで、ライフルを立てて座り込み.....疲れているせいもあったが.....じっと明け方を待った。秋口の夜風が気持ちよかった。

やがて、空が白んできた。

——風よ吹け。

老人は関ヶ原の合戦で、小早川勢の寝返り・突撃をいまかいまかと待つ徳川家康の心境だった。泰然自若とすれども心は逸っていた。

老人が川からの風を感じるよりジョンが奴の臭いを感じる方が早かった。吠えそうになるジョンの口を押さえ、リードを外し野に放った。ジョンは弾丸の勢いで飛び出していった。予定ではやぶの背後から、奴をせき立てるはずだ。そして飛び出してくる奴を老人のライフルが仕留める。

白んできた草原で黒いジョンの身体はよく見えた。老人とジョンとの距離は予想以上に伸びていった。五〇〇メートル、八〇〇メートル、.....そして旋回した。老人は、あわてた。遠すぎるのだ。ジョンの飛び込んだ地点はやぶより遙か後方だった。ライフルに再びスコープを装着し、調整、固定した。

射程距離自体は問題ない。もともと、三〇口径フルパワーライフル弾は最大射程四五〇〇メートル、有効射程距離八〇〇メートルだ。有効射程とはほぼ直線と見なせる弾道で弾が飛んでいく距離である。地球上の物体は放物線を描くのでこれだけはどうしようもない。だが、ベテランの狙撃兵ならともかく、ただのハンターである老人に取り、一〇〇メートルを超える射程での狙撃の経験はなかった。ここは一か八か、ライフルの精度に頼るしかなかった。一流の狙撃銃であった機種である、スコープのドットに合わせて狙撃すれば.....だが、それも賭けに過ぎない。

老人はスコープをのぞいた。やぶの向こうに黒い大きな影が見えた。ジョンがその辺りにいるはずだが、ここからでは確認できなかった。何とか知恵を絞ってそこから奴をあぶり出してくれと、老人は祈った。

だが、あぶり出されたのはジョンの方だった。伏えたものの反撃されて、敢えなく敗退したようだった。

そう判断した老人はその黒い影の左側の肩の下に照準を合わせ、やぶの灌木越しに、絞り込むように引き金を引いた。

ドーン！

朝っぱらからの迷惑な一撃だった。

老人は、ライフルを持ち替えてレバーを引き再装填すると、ライフルを担いでやぶに向かった。目視距離八〇〇メートルだったが、実際に小走りで向かうと長く感じた。

やぶの向こう側には、大きなヒグマが倒れていた。ジョンは勝ち誇ったようにその側に付いていた。老人は皮肉気にジョンに笑顔を見せた。ジョンはしっぽを囓んでくるくるとまわった。老人はそんなジョンを放っておいて、ライフルの先でヒグマをちょっと突いた。すでに絶命していた。調べると背中から撃ったようで、心臓を弾丸が貫通していた。

それだけ確かめて老人は満足げに頷いた。完全なまぐれ当たりだったが、まぐれだと証明出来るのは老人本人しかいない。



### 3. 回收



### 3. 回収

日が完全に昇り、朝になると老人はこいつの回収方法を考えた。いつもは狩猟仲間と来るが、今回は完全に一人だった。車を停めた場所からは遠いし、かといってライフルを持って村に下りるわけにもいかない、せめて、ライフルケースを持ってくるべきだった。老人が一旦車に戻り、村まで車を回してくるまでジョンが見張っていてくれたらいいが、そんなことを期待できる犬ではないことは今回よく解った。

老人は、ライフルを担ぎ直し、来た道に戻り始めた。ジョンの首輪のリードをしっかりと手に持つことを忘れなかった。だが、帰りは行き道より遠く感じるものだ。必死で奴を追跡した獣道も、人の通れる道には見えなかった。そのため、途中まで同じルートで帰還していた老人だったが、山道を見つけるとそちらに道順を変えてしまった。後は、車を置いてある箇所まで、歩くだけである。

途中、最後の昼ご飯となる菓子パンを食べた。ミネラルウォーターも残り少なくなっていた。老人が、切り株に腰を下ろし菓子パンを食べようとする、ジョンが前に座りしっぽを振った。

「お前、今日何か仕事をしたか？」

ジョンは目で笑い、「何をおっしゃるんですか、僕が熊を退治したじゃないですか」そんなことを態度で表した。老人は、フツと笑い、ジョンにパンを分けなかった。全部パンを食べ終わった後も、もう一つ老人がポケットの中から何か餌を出してくれると信じてお座りしている。

だが、休憩はこれで最後だ。

「ジョン、いくぞ」

そう言って老人は立ち上がると、ジョンはしょうがないな「今回だけですよ」という態度で付いてきた。

もう一山越えると、老人のランドクルーザーが見えてきた。老人は後部ハッチを開けてライフルを金属製の箱に入れて鍵を掛けてリュックを放り込み、ハッチを閉めた。そしてジョンを後部席に乗せると、エンジンを掛けランドクルーザーを発進させた。

狭い村道を走り、あの村を目指して走った。途中のガソリンスタンドで軽油を入れ、ミネラルウォーターを買った。給油中にジョンにはクラッカーを一枚食べさせた。

「おじいさん、これだけ？」

と、不満げな目で老人を見た。

「そう、それだけだよ。ジョン」

老人は答えた。次に来るときにはちゃんとした猟犬がいるなど思っていた。

「はい、給油終わりましたよ」

「ああ、ありがとう。いくら？」

燃料タンクは空になる寸前だったらしく、八千円取られた。軽油といえども馬鹿には出来ない。

また、エンジンを掛け距離計をリセットして老人はギアを入れた。

あの草原まで四輪駆動にして上り、ウインチを強引だが車のルーフ越しに後ろに引っ張り、熊に引っかけて荷台まで引っ張り上げることを考えていた。そんなことばかりしているから、車もウインチも傷だらけなのだが、老人が趣味でやっていることだから誰も文句は言わない。

そして、機嫌良く村の側道を通り、裏山に差し掛かる狭い山道の手前で、老人は車を一旦停めた。セレクトレバーを四輪駆動低速に入れギアをリバースに入れクラッチをつなぎ、車輪を一回転させた。ゴリッとメインデファレンシャルギアがロックされた。四輪駆動状態になったのを確認して老人は坂道を上り始めた。

草原になっても、ぐいぐいと登っていく。やがてあの灌木があったところにたどり着いた。

——おや、熊がいないぞ。

老人は慌てて、車を停めて外に出た。ジョンも窓から飛んで出て来た。

突如ジョンが、吠え掛かると、イタチがその場から走り去った。ジョンもしばらく追撃したが、イタチの方が俊敏で逃げられてしまった。

老人は事態を把握した。老人とジョンがいない半日の間に、熊の死体はイタチや野犬にきれいに解体され食べられてしまったのだった。ところどころ、剛毛の付いた皮や小骨が落ちている。大きな骨は野犬のおやつになったのだろう。

老人は寂しげな表情で、小骨を一つ拾い上げた。

「これが、二日間の戦果だ。三〇口径弾を三発、燃料七〇リットル、菓子パン三個、……ジョン、理解できるか？ 世の中は不条理だ」

そうつぶやいた。

ジョンは「だから僕が残っていれば、追い払ってさしあげたのに」と老人を責めるような目で見つめた。

老人は不機嫌に目をそらした。ジョンにまで責められたくはなかった。第一プライド

が許さない。

「そう、不条理なんかじゃない、食物連鎖と言うんだ。大自然の摂理だ。ジョン、分かるか？」

老人は、ジョンに目をやった。

「そうですもおじいさん。熊がなんです。奴を見事に討ち取った。それでいいじゃないですか？」

なんてことをジョンが言うはずもなかった。相変わらず何かくれと、口を開けてしっぽを振っている。老人は、残った小骨をジョンに与えた。

ジョンは骨をくわえてどこかに歩いていき、前足で穴を掘って、そして埋めた。

もうここに取りに来ることは出来ないのに、……そう老人は嫌味を言おうとしたが、奴を埋葬しているんだと、ふと思った。

老人が埋めたところに印の墓標を置こうと石を持って近づいた瞬間、ジョンはがうとうとなった。

人間と犬との間に友情などと言う甘い感情は存在しない。老人は長年の経験からそれを知っていた。三万年前の太古から、人間は犬に食料を与え、犬は代わりに野生動物の接近を二十四時間監視する。その紳士協定が犬の本能と合致しただけのことなのだ。

老人はジョンが骨を隠す……と言っても、全部老人が見ていたが……のを待って、また車に戻った。今度は転落を警戒しながら、ゆっくりと草原を降りていった。

村に降りたところで、四輪駆動を二輪駆動に切り替えていると村人から声を掛けられた。

「あれ、あんた初めて見る顔じゃな？」

「ああ、向こうの山の尾根から熊を追ってきたんだ」

「熊？ そんなのいるのか」

——存在にすら気付いていない奴に教えてもしょうがない。

「いるとも。農作物に被害はないのか」

「ああ、たまにタヌキか何かに食べられてるけど」

——二メートルのヒグマと知ったら驚くだろうな。

「タヌキ以外にも色々いるぞ。また来るよ」

「山を荒らさないでくれよ」

村人はそんなことを口にした。老人はかちんときたが、黙っていた。

奴との一対一の勝負に勝利したのだ。他人にとやかく言われたくなかった。それもハンターが頭脳戦と言うことを知らない奴には。彼らはただ山に入ってライフルをぶっ放して帰って行く迷惑な存在だと思っているようだった。

老人は四輪駆動車を発進させ、帰りにスーパーで肉を買った。ジョンへのご褒美

だった。

「ただいま」

と、家に帰ると老人の妻が迎えた。

「あらあら、獲物は牛肉一パックだけ？」

老人は苦笑した。話をする気にもなれず、そうさ、と答えた。そして優しくジョンを撫でてやった。了



---

老人と犬

---

著 黒川文

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---